

縄文晩期農耕論についての覚え書

賀川光夫

はじめに

日本列島における農耕の開始を縄文時代にもとめて、その内容を整理し農耕開始の問題を提起した先学諸氏の見解は、おおむね、縄文文化の中期からはじめられた。その代表的なものは、中期農耕論（大山・1927、藤森・1970）などで、結論的には、渡辺誠氏が桑飼下遺跡で述べているように、東日本の要素の総点検と、縄文文化の伝統的変遷要素の問題の中で、農耕開始の問題をとらえなければならぬということであった。渡辺誠氏は、そうした問題を各種の新しい研究方法を通して素晴らしい業績（渡辺誠1975 a、1975 b）をあげられた。しかし渡辺氏の論考の基礎もまた、新しい問題から整理されて、打製石器の問題に集積されたことで、農耕論の問題を提言されたのである。考古学は「鋳の学問」だということで、渡辺氏の「縄文農耕論の新しい視角」は評価されている。そして渡辺氏の見解もまた「東北日本から西日本への伝播なしには縄文後・晩期のそれを正しく理解することは困難だ」として縄文研究の本流を再確認したことになる。

農耕論を九州で考える場合も、「九州での伝統的文化要素を排除した残余の資料のみが、大陸との対比可能な資料である」として、このことの峻別を考えるべきである。（これを筆者の農耕論に対しての忠告と考える）としている。たしかに九州の縄文晩期農耕論は、東北日本のそれと断絶していたかのような印象をあたえていたし、その内容も九州の縄文文化の伝統的文化要素を峻別した結果として生れたものとは言いきれない問題があった。しかし縄文晩期農耕の問題において、留意を必要とする点は、この問題の一つの本質を明らかにすることである。農耕の伝来という課題の中では、新しい生産の過程を縄文文化の伝統の中に求めようとしても、それは困難なことである。そうしたなかで農耕論を考えるとき、生産具としての打製石斧の消長を主とすることだけでは内容を明らかにすることは不可能で、この問題に関する限り、筆者自身も多くの批判をうけた。そうしてみると、縄文文化の体質の中から、縄文文化の伝統的問題を排除して新たに農耕（穀類栽培）を生み出す要素は、一体何であろうか。

中尾佐助氏の照葉樹林文化（中尾1966）や、佐々木高明氏の栽培の起源（佐々木1971）などは、照葉樹林の枠の中で半栽培がおこなわれたとする考え方で、たしかに採集文化の中から農耕への志向があらわれたとして縄文文化研究に一つの指示をあたえたことになった。しかし、それはあくまで、「そうあるべきである」とする植物学や民俗、土俗例の集積であって、それを厳しく証明する材料の抽出は困難ではなからうか。この点について渡辺誠氏には興味深い論文が多く、抜歯論（渡辺1966、1967）や植物食料の採取論（渡辺1972）などがある。また最近では理化学的分析にもとづく研究の応用などが実証として登場してきている点も注目しなければならぬ。

農耕という全く新しい生産技術が、何らかの形で包容可能な下地なしには発展できないにしても、この新しい技術を縄文文化の中から抽出することは、大へん困難が多い。そこで筆者は、過去において「縄文文化的要素を排除して残余の資料を大陸と対比する峻別な方法」と違って直接大陸の資料との対比という安易（打製石斧のあつかい）な方法において立論したことはある程度事実であった。そこでこの縄文文化的要素をふまえた農耕の問題を厳しくとらえてゆかない限り前進なしとする渡辺

誠氏の意見は正しいし、筆者も同様である。一方縄文文化の伝統の中に照葉樹林文化という半栽培の「こうあるべきだ」とする立論を穀類栽培にも普遍しなければならないとする安易な考え方にもただちに肯定するわけにはいかぬ。何故なら、分析などの化学は実証をどうして考証する考古学のあり方を優先させる必要があるからである。歴史的課題はデータではなくその手続の因果関係によって評価されるべきものであると考えるから、農耕論を考古学自体のものとして教えようとする者の考えはややもすると「非科学的」として批判されるかもしれぬ。

縄文晩期の諸相

縄文晩期初頭（晩期1）の遺跡のうち、あらゆる角度からみて、大分県大野郡緒方町大石遺跡がもっとも問題を多くもっているものとする。晩期という時期の設定は、いろいろ問題があるが、弥生文化の前段としておくほうがよからう。コメを栽培することをもつて、弥生文化とするならば、縄文晩期は、「水稻以前」という名称がよい。また採集文化としての縄文時代の終末ということからすると、採集生活からの脱皮、すなわち「農耕のきざし」と呼んでおく。いずれにしても、農耕に強くあこがれた、その方向にむかった時代で、農耕をこの「晩期」にあわせて考えることは、むしろ照葉樹林文化論にとってもっとも理論的の合致すると思う。「農耕のきざし」から「水稻以前」というこの時期の説明には、石鏃の後退と、打製石斧（扁平石器）の量産があげられる。石鏃の後退という現象は、具体的にそれを統計することは非常に困難であるが、大石遺跡のように、打製石斧の量産と対比しての相対的問題としてあげることができる。そして、石鏃自身の機能の問題も考慮しなければならぬであろう。また完全に農耕にはいった弥生文化のがわからずすれば、石鏃の数と機能は、その量と目的に



第1図 大石遺跡全景

において狩猟文化（縄文文化）の存続という点が指摘される。したがって石鏃の後退と、打製石斧（扁平石器）の量産は、食物の採取を、農耕により依存する方向でとらえることのできる問題である。九州における「晩期」とはそういう時代である。

また、より農耕に依存する時代の志向として、石鏃（弓矢）を石斧（農具）に変えることと同じように、土器製作の問題の変化も見逃せない。縄文をころがして文様を施す技術は、縄文時代の伝統をより強烈に引きついだ証拠としてみられるもつとも具体的材料であるが、その容器としての土器は製作上胎土に骨材を混入することによって焼成されなければならなかった。所謂粗製土器の一群である。これに対して、細土（製成された粘土）を使用し、焼きあげ器壁を強くし、それにより水分の滲透を防ぐ方法が考えられ、加えて、炭素を吸収させることによって水分を容器内にとどめることの工夫は、縄文時代の土器製作技術のもつとも大きな変化といえることができる。磨研して器壁の粒子を緻密にし、炭素を吸収せしめて硬度を増し、水分の滲透をふせぐ工夫が、黒色化を増進させ、ここに黒色磨研土器の発達をもたらした。

黒色磨研土器という緻密な規定は、単に器壁が黒色で磨研してあるというのではなく、縄文各時期のものにもときにみることが出来る磨研土器とは根本的に異つた要素をもつということである。すなわち「水分の滲透」を防止するという意識からの所産として粘土粒子を緻密にすること、炭素を吸収せしめることを前提とした薄手の黒色磨研土器を指すものである。

土器や、石器の以上のような問題は、生産手段のうえである種類の変化がおこったことをしめすものであって、はっきりと生産機能（目的）にあわせた分業という行為で、そのうち、硬玉の加工技術は、これまでの採集社会にはあり得ない宝器生産として重視されねばならぬ。硬玉の加工技術が、何でおこなわれたかはいまだ明確ではないが、これが輸入技術ではないと断言できないものがある。この珠玉加工技術は、すでに縄文後期末には西日本の各地において普遍するのであるが、晩期のそれはコ字形の勾玉によって代表される。珠玉加工技術は、練達した技術を必要とすることから限定された職人の分業によってなされたものと推理され、珠玉のそれは、一部特殊な人達によって使用されたものと考えられることができる。

以上の如く、打製石斧の量産、黒色磨研土器の出現と、それを製産する分業の中にあつて、特殊な宝器の存在を分担する職人の出現は、たしかに生活活動の変化を物語る充分な材料といつてもよい。西日本における土偶の出現が、そうした時期において生産され、珠玉とともに三万田東原遺跡において数十個の多くを出土する事実などに注目しなければならない。

さて、打製石斧も、黒色磨研土器も、珠玉加工技術（大珠など）も、そして土偶においても、東北日本においては、それ以前の時代においてすでにある程度の発展をとげたものとする意見が多い。そして、これらの問題と絶縁したかたちで、この問題をのみ討論することは意味がないことだ。そして「東北日本からの影響にたつて、それを割り引きすることの峻別な態度こそ、西日本の新たな研究の前進がある」と考えるむきが強い。

勿論、こうした問題は前述の如くある程度正しい。そして、われわれが、農耕論を立証するにあたってあげた以上の問題、「晩期の諸相」は、たしかに、東北日本のそれにもすでに可成り以前から追求されてきた問題であることを知っている。しかし、西日本のそれが東北日本の影響として発達するという公式の外に、西日本に接する大陸、半島のそれとの関係を重視することは許されぬものであろうか、はっきりとした農耕の所産としての大陸文化における同種の符合点は、農耕社会のより明確な相似ではあるまいか。一方縄文農耕論の研究に照葉樹林文化論または作物学からする理化学的分析とも含め



第II図 縄文晩期土器（黒色磨研1式） 大石遺跡

て、農耕開始の問題を考究する方法が進められているが、今日迄のところそれらをもって決定的な事例とするような問題提起はないように思う。こうした研究をふまえて更に確認されたことは、打製石斧の機能の問題とその量産、黒色磨研土器の研究、珠玉加工技術など特殊な技術による生産活動の問題などが更に深められねばならぬという厳しきであったと思う。そして更に関連して、晩期の集落・ムラの構造は注目すべき問題の一つであり、珠玉加工の発達は、社会制度の課題として重要である。

大石遺跡のムラ

阿蘇山の東西には縄文後晩期の遺跡が多い。このうち、西側の三万田東原遺跡、天城遺跡（熊本県菊池市）の二遺跡は後期末の遺跡としてムラの構造をある程度把握できる重要な遺構をもって注目された。特に天城遺跡では溝状の遺構の性格を徹底的に解明することはできなかったが、ムラは溝によって仕切られ、まとまりある家屋が存在し、墓地としてカメ棺の群墓が注目された。しかしムラの状況を細しく解明されることなく調査を終了させる結果となり、後期末葉の村落形態は細部検討を後に残すことになった。

後・晩期遺跡でムラの状態（賀川・1974）がほぼ明らかとなった大石遺跡の場合は、注目されてよい。大石遺跡は、阿蘇山の東側の傾斜を別府湾にむかって流れる九州第二の大河、大野川の支流十角川により深く刻まれた谷で囲まれ、標高360mの台地に位置する。南側は十角川に合流する支流を界にする祖母山塊に接する。この山塊は、第三紀中新統にぞくし、そこから運ばれる良質の石材（安山岩、流紋岩）は、河床などに堆積して石器の原石として利用されている。遺跡は東西500m、南北450mで、中央は北側より谷が刻入して狭く、南縁まで200mである。遺跡の範囲は、遺物の散布状態からみて、この台地全域に及ぶものと推定できる。

大石遺跡の発掘は、1960年に試掘を実施し1962年第2次調査、1965年第3次、1966～67年第4次と、試掘を合せて5度の調査が実施された。調査は広大な台地を6m四方の調査区を1単位として全体をグラフ状に仕切り、その主要部が調査の対象となった。第2次調査になって、有望な住居地帯を発見、その状況の探索に十分な観察をおこなうことができた。住居跡は、堅穴式住居ではなく、平地に主柱礎（厚さ5cm程度の扁平石）を置くだけの設備であった。この支柱礎を中心として、半径2.5mの範囲は堅く固められ多量の土器、石器が発見された。炉跡と推定される焼土は、あるまとまりのある厚さで推積し、支柱礎に近い位置を占めていた。

住居形式は、平地式で、支柱礎から柱が建てられ、それに四方からの寄木を支えて円錐形の骨組を形成するものと考えられた。地上まで葺下しになる円錐形の家屋は、第2次調査で2軒、第3、第4調査では担当数の同様の住居が発見されているので、大石遺跡の住居形式は、統一された円錐形住居とみられた。住居跡内部と想定される炉跡を中心とする地帯から多量の遺物が発見され、前述の如き黒色磨研土器、打製石斧との組合が明らかとなった。その組合せからそれらが同一時期の単純形式に終始することで晩期1式に位置づけられる重要な遺物であった。また遺物の散布状態から、住居跡の重複がみられることもあり、同時遺物の範囲の中での建て替えがあつたものと推理される。

さて、住居地帯は、台地の南部に集中し、東と西側に稀薄ながら存在することが明らかとなった。こうした住居地帯のあり方からすると、大石のムラは馬蹄形をなしていることが明らかとなった。北側は台地にむかって刻入する谷があつて、この部位では凹形をていするが、この谷の一部に豊富な泉があることを注意する必要がある。馬蹄形に展開するムラの中央は可成り広い広場で占められる。この広場の中央に位置して、大きな堅穴が発見された。この堅穴は通常の住居ではなく、その構造が



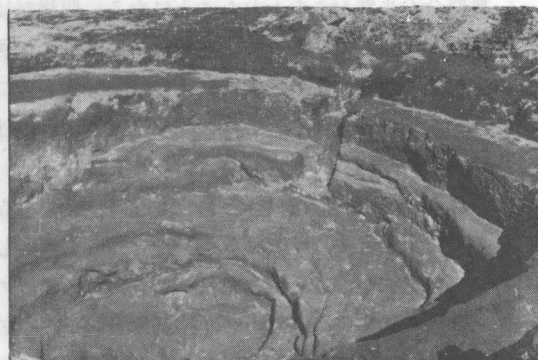
第Ⅲ図 大石遺跡堅穴状遺構

直径8 m. 深さ3 m階段より左側の広い場所が首座とみられる

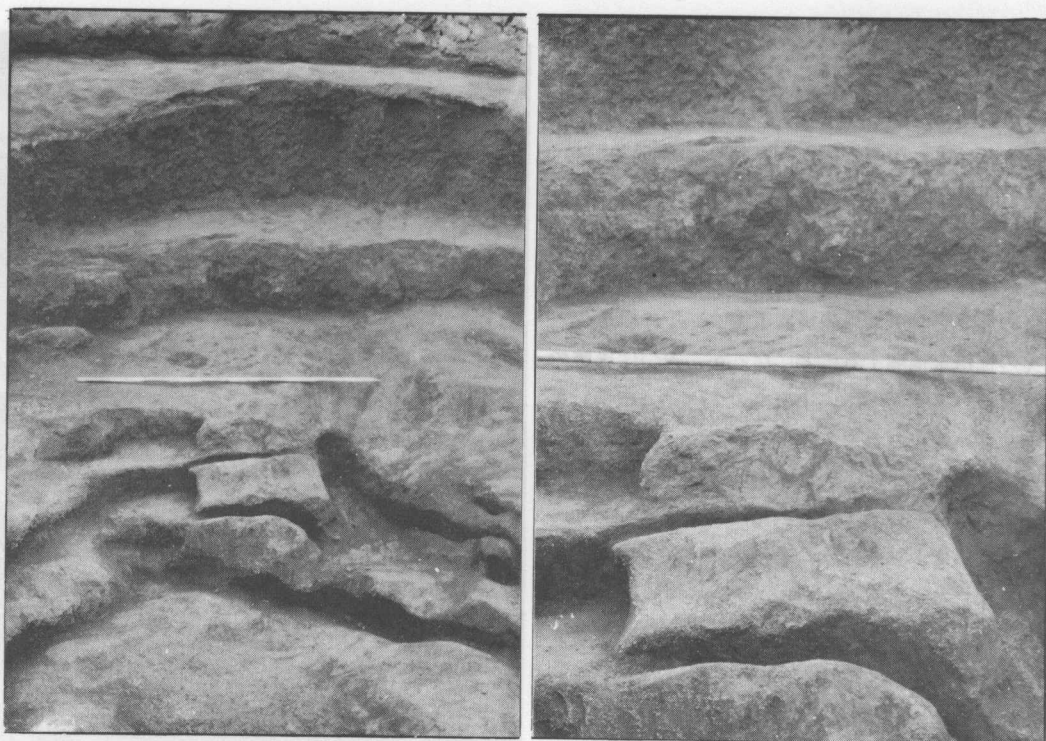
きわめて注目されるのである。直径8 mの正円に近い堅穴は、深さが2.8 mもあり、中央の広場(径3 m)にむかって西側を除く4段のスタンドが形成されていた。西側は高い周壁を背にやや傾斜しているが広く1段が形成されて、他の位置と異なって、この部屋から、中央の広場に粘土を切り据えた階段で連絡されていた。

円形スタジアム風の堅穴遺構は、その構造からその性格を推理することになるが、先づ住居跡ではない。スタンドや、中央のステージ(広場)を有しているところをみると、集会所、または舞踏会場などにあてることになる。しかも内部は、首座とみられる西側の1段の場所と、その他の4段の一般の席とからなる。集会の際は、主催者と代議員席に分かれることになろう。かりにこの会場に人員を配置するとすれば50人はらくに着席できる。この首座の主催者と、50人程度の代議員が一度に会合するとすれば、大石遺跡における推定戸数から周辺の地帯からの出席を必要としなければならぬ。少なくともこの遺構は、そうした性格のためにつくられたものであったと考えなければならぬ。かりに50人の代議員を動員するとすれば、大石の北部に隣接する木野遺跡、更に小高野遺跡などの晩期の大集落を想定して考える必要がある。周辺のムラの首長と代議員が集合するとすれば、この会場は立派にその目的をはたすことができる。首座から粘土を切り据えた階段によって中央の広場に入出入りすることができる。会議を進行することができる施設としては階段式の円形の構造はより合理的であるはずである。

首座には各ムラの首長が位置したであろう。ムラムラの代議員は、首座を取り巻く階段に位置して会議をすすめることになる。この堅穴の構造からすると、少なくとも完全な合議制がとられたことになるのであって、その合議体制から縄文晩期の社会秩序というものが鮮明に把握されるはずである。一つのムラの力量ではこの施設はとうてい造成できぬものであろうから、村落共同体の合意にもとづくものと考えられる。縄文晩期のムラの統



第IV図 大石遺跡の堅穴、土段I
粘土を土段状に整備する、(上・下)



第V図 大石遺跡の堅穴，土段II 土段と階段

合があるとすれば、すでに生産の背景は農業に依存しなければならぬであろう。ここに弥生前段階の要素が写出(賀川・1973)されることになる。ムラは一つの共同体であって、それを統合することはムラの単位と合体することで、当然代議員をもつて総括されなければならぬ。

舞踏会も当然おこなわれたことになる。収穫祭はムラごとにおこなわれるが、周辺地域の人々も集合したはずである。かりに大石遺跡の同時期の住居跡が10軒と推定して、それぞれ、5～6人の家族を有していたとすると、常時50人ないし60人の人口があったことになる。舞踏会に集合できる人数は40～50人であろうから、この設備は、大石遺跡に住居している人達だけでもよい。舞踏会の主催者は代議員会の首座(首長席)を占めることになる。代議員席は一般の観客席にあてられることになる。舞踏会がどのような時に、どのような方法でおこなわれたか全く明らかではないが、ムラの連合体としての代議員会や、その他収穫祭などには劇場として利用されたものと考えたい。第4次の発掘で、この堅穴式遺構が全体を露出されたとき、その階段の一部から硬玉の勾玉が1個発見された。ムラの長老・首長の胸に飾られたものか、舞踏会の踊り子の胸に飾られたものか明らかでないが、この硬玉の勾玉の発見は興味深い。ともかく大石遺跡の特殊堅穴遺構の発掘は、晩期のムラの合体(村落共同体)をあらわす興味深い遺構である。

原始農耕の実態

円形スタジアム風の堅穴の発掘は、ムラの合体を意味する重要なものであったが、その共同体の生産背景は一体如何なるものであつたらうか。大石遺跡の南側祖母山麓に通称「カシ山」がある。この一帯はアラカシ林の原生樹林帯地で一部にコナラなどの樹木が混生する。この樹林帯における堅果

(ドングリ)は、重要な植物性澱粉で、食糧として重要である。当然こうした堅果の採集はおこなわれていたものと考えられるから、農耕にのみ依存していたとは考えにくい。伝統的な照葉樹林帯での採集が存続したことになる。

さて、当時の農業について、植物学者荒金正憲氏によれば、「大石遺跡周辺は、現在畑地であるが周辺を含めて潜在植生が全くみられず、このまま自然に放置すれば、二次的にススキなどの草原となろう。」と調査結果を報告された。その理由の一つとして「反覆焼畑がおこなわれた結果ではなからうかと考える」とされる。

またプラント・オパールの検査から、宮崎大学農学部藤原宏志氏は「晩期土器からシコリビエと考えられるものを検出した。」と非公式の連絡を得た。

この二つの検査結果からただちに大石遺跡の情景を考えることはある程度研究の蓄積をみなければなんともいえぬが、大石遺跡の晩期遺物包含層の花粉分析をおこなった金沢大学藤則雄氏はクリ・イヌブナ・コナラ・マツなどの樹木を検出しているところから、周辺の樹林を想定できる。またイヌワラビやイネ科(雑草類)の花粉が含まれているといわれるのです。すでに樹林の伐採もおこなわれ、焼畑がすでにおこなわれて一部に二次的植生が出現していたことがわかる。火山灰を主とする包含層であって花粉は僅少であつたらしいが、当時の植生の概要がわかる。

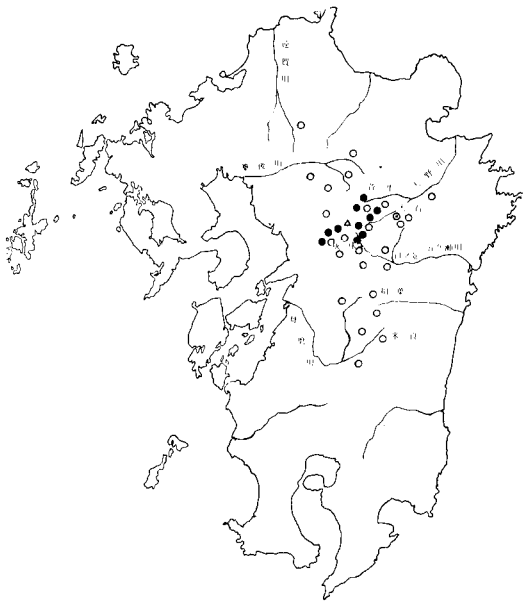
焼畑による耕地化は、作物としてアワ・ヒエの栽培が可能であるが、分析によりシコリビエの検出は興味深い。九州山岳地帯の阿蘇の東西では、シコリビエの栽培が近年までおこなわれていたことが明らかで、火山灰台地でのもっとも適した穀物ということがいえる。

平坦な台地の表面は厚い火山灰で覆われていたが、当時の植生は照葉樹林であった。その一部が焼畑として農地になるのであるが、休耕の場所を含めて、農地は相当広い地帯に及ぶものと推定される。畑地を常畑化することは技術的に相当困難で、施肥技術を習得せねばならぬ。常畑への発展は、当時としては問題があるとして、畑地は平坦かつ広い台地の上で営まれたことになるので、休耕地を含めて焼畑の輪作は通常の焼畑の概念からするとよほど容易であつたように思われる。森林が代採されて二次的な草地を焼畑することは、森林を焼くことに比べればかなりたやすいと考えられる。しかもすでに広大な面積を耕地化して、一部を休耕すれば、回転を早めてもよいし、全体の収穫量は落ちない。それでは大陸における黄土地帯の農耕に比すれば収穫量を期待することはできる。

大石遺跡の周辺は、南側のカシ山を除いて、他は同じような台地で、そこには晩期の集落はなく、わずかな打製石器のほかに遺物の散布はみられない。しかし台地の各部にもうけた試掘溝には比較的厚く推積された灰混りの層が広く存在していて、この一帯が過去においてくりかえし焼畑させたことが明らかにされる。荒金正憲氏の二次的植生が草地として再生されることが焼畑によるものではないか、とする考えと符合することになる。

大石遺跡を中心とする中九州の縄文晩期のムラの構造は、それをささえる農法が、以上の如く、焼畑を主体としながらも次第に常畑化していく傾向から、画期的共同体の形成を想定することができた。その農業共同体の主な栽培植物は何であつたか、それを想定することは困難が多い、しかし、今日まで九州山脈一帯の農法として長く伝えられていた焼畑は、非常に広範囲で、それを総合すると、その栽培についての問題を提起することができる。まず、宮崎大学農学部藤原宏志氏の研究によるプラントオパールは、大石遺跡で「シコリビエ」らしい植物の検出をおこなった。この非公式の情報が、この一帯の過去の焼畑栽培の穀類と一致する点が多いのである。

筆者が調査したシコリビエの栽培地は、阿蘇山の東方台地一帯に広く分布し、その栽培はごく近年



第VI図 九州の焼畑調査地

○印 焼畑 ●印 イネ・シコリビエ栽培地

この民俗資料をあてることは問題であると思われる。しかし、今日まで発見された縄文後晩期のコメの資料のうち熊本市上ノ原遺跡の炭化ゴメ(小谷・1971, 1972)や、同県菊地郡大津町蛙石遺跡(江坂・1974)、長崎県島原市郊外山ノ寺遺跡(岡崎・森, 1962)などの土器の靱形圧痕、大分県直入郡荻町恵良原(賀川・1972)の炭化コメの出土など、そのいずれもが、焼畑地帯と考えられるので、これらの資料から充分に証明されるように、焼畑によるコメの栽培は可能性が強い。そういう意味では、西原村の焼畑における陸作のコメの栽培は大いに注目されることになる。

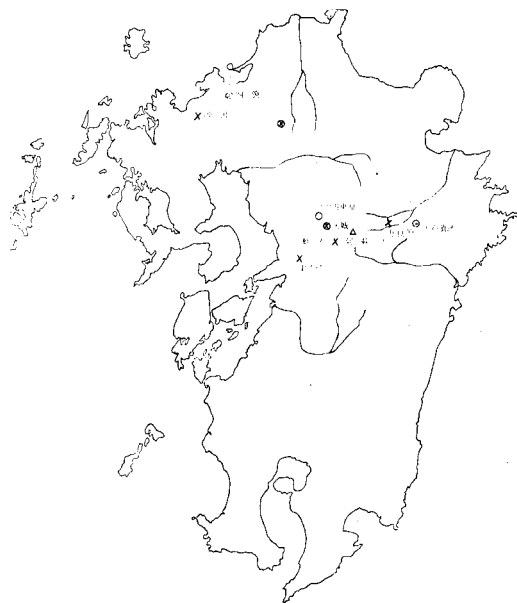
コメが縄文時代終末期に栽培されるということは、すでに岡崎敬氏(岡崎敬他1968)の研究で土器の圧痕形の資料である。西北九州は、前述の如く佐賀県唐津市汲田貝塚において、炭化コメの実態が確認されたことでも明らかなように、わが国でもつとも早く稲栽培がおこなわれたところとされている。汲田貝塚は、弥生前期、板付I式土器を包含する貝塚と隣接した位置であって、一部が、炭化ゴメを発見した夜白式土器(晩期IV式土器)と層位関係にあった。弥生文化が稲の栽培によるとされることは、この炭化ゴメをはじめとする一連の縄文晩期の稲作資料により縄文—弥生とつながりゆくことができる。

コメは水稻と、陸稲に分けられるが、汲田貝塚のそれは地理的環境から水稻と考えてよい。そのあとをついで、板付I式の分布範囲は水田可能な立地(湿地)をもとにしている。福岡・唐津平野など大陸、半島の門戸とされる地域の低湿地遺跡ではすでに水田の経営ははじめられ、次第に弥生文化の成生をものにしたと考える。これに対し、縄文晩期初頭から中葉にかけては、すでに考古学の資料から推理して、コメの栽培は存在し得たと解され、その立地条件から水田可能耕地は見当らず、雲仙嶽の周辺山麓地帯、阿蘇東西の高地などをみれば、陸作地帯と考えてよい。ここに焼畑によるコメ

までおこなわれていたといわれる。とくに大分県竹田市管生地区の台地では、それを焼畑によって生産していた生存者はまだいくらか残っている。この地帯では近年まで休耕地を広くもち、これを焼畑して輪耕するのである。作物は、シコリビエとソバであって、その閑地にサトイモ・マメ類・ダイコンなどを作るのである。

阿蘇西南外輪山麓の西原村灰床地区では、つい先年までシコリビエの栽培が広くおこなわれ、それを常食にしていたといわれる。このシコリビエは、「チヨウセン」ともいう名で呼ばれ、食糧と飼料とに広く栽培し、前者の場合は穂刈り、後者の場合は根刈りして収穫する。焼畑の順序は、雑草おさえにソバを初年度(他の地方ではソバは3年目というところが多い)、次にチヨウセン、または陸作のコメを栽培する。こうした焼畑農法からみると、中九州一帯は、広くシコリビエの栽培地帯と考えることもできる。

熊本県阿蘇郡西原村の焼畑における陸作のコメの栽培であるが、これをもつて縄文晩期の栽培に



第Ⅶ図 九州におけるコメ出土地
 ⊗ 縄文後期（分析による推定）
 × 同晩期（炭化物）

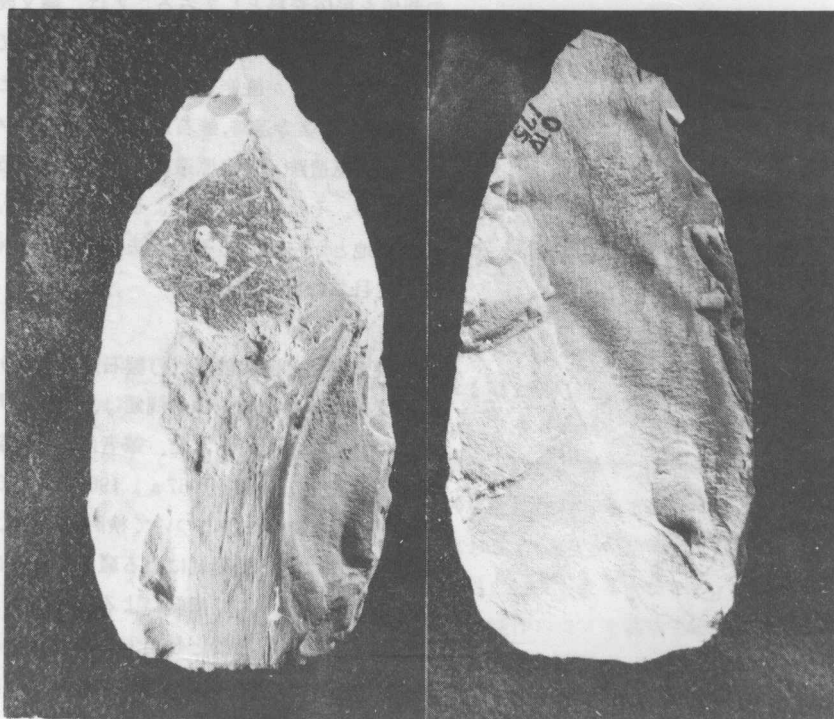
の栽培を民俗資料としてみることは、縄文晩期のコメ出土地帯と符合して注目される。そしてコメとシコリビエとが陸作で栽培されていたことの実証として、山ノ寺遺跡、蛙石遺跡その他のコメの圧痕、上ノ原遺跡、恵良原遺跡その他の炭化籾の発見がある。それらが焼畑によるコメとシコリビエの栽培地とが一致してその農法に鋤を使用する事実が注目される。

焼畑農法と鋤の使用（打製石斧の問題）

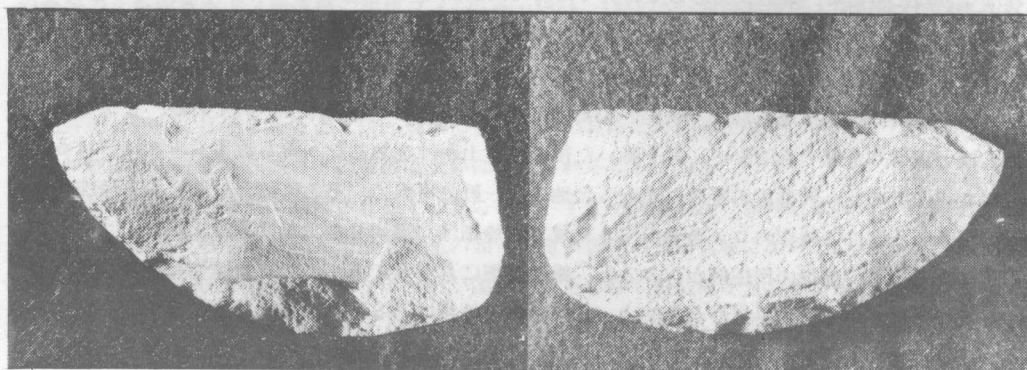
縄文晩期農耕論の一つの問題は、打製石斧の量産についてのことであった。筆者はこの石器を扁平石器（賀川・1966, 1967 a, 1967 b, 1967 c）とよび、その製作技法について検討を加えた。そして剥片技法において縦割による扁平な石片は、先端を加工して石鋤に、横割による石片は半月形に加工して石庖丁形石器とした。この石庖丁形石器の加工技法については、一部の反対意見があつたが、おおかたの賛同を得たものの、石鋤についての考察には反論が集中した。もともと焼畑農耕を

主体とする縄文農耕は一般に急な傾斜を耕作する例が多くそのために農具はいちじるしく制限されなければならぬと考える。最近までおこなわれていた九州山脈中での焼畑に例をとっても、種は袋に入れたかマイカケにくるんで種蒔をする。この場合ザル・カゴの類の道具は所持しない。種は蒔きおわると、ホオキや竹ザサで土をかぶせるか、足で土かけをする。この場合も鋤や鋤などはもちいない。したがって焼畑は伐採後焼くだけで耕作の必要がないことから鋤の必要はないのである。しかし一部では、浅い溝切りを鋤でおこない、種を蒔いた後に鋤で土かけをおこなう所も数多くみられる。とくに九州山脈のうち阿蘇山の東西に広がる台地は、一般に平坦で、そこにはシコリビエと陸作のコメが栽培される。この陸作のコメを栽培する地域での焼畑は、溝切りと土かけを鋤でおこなうことが一般的である。この焼畑の民俗例からみると、鋤は焼畑にも必要であつて、それは作物種類、焼畑をおこなう場所に（主として平坦な台地）よっては、鋤の使用はある程度必要なことになる。

さて、縄文後晩期遺跡では、打製石斧（扁平石器）が出土石器の60パーセント以上の数をしめることがある。相対的に石鋤の数は減少するのであつて、この点からも狩猟のほかには打製石斧の用途を考えなければならぬ。打製石斧は手斧形であつて、通常の斧のように重量を必ずしも必要としないために剥片（石片）や、扁平礫を使用する。したがって、この石器に関する限り森林の伐採には使用できぬ。石斧の多くは扁平性が強く、一部には局部磨製のみみられる。刃部の加工は、一方の先端に集中する他、左右にもみることができ。刃部の磨耗は縦ずれのものが多く、一部にはその顕著な資料から、突棒先端に固着されて球根植物（ナガイモ・サトイモ）などの掘り具とされたものと考えられる。また、磨耗が片面のみにあるところから、溝切りにも使用されたものもあつてよい。両側の加工部の磨耗は、刃部（先端）のそれに比較すると少ないが、大部分の資料に観察される。したが



第Ⅷ図 打製石斧の磨痕・擦痕（使用痕） 大石遺跡



第Ⅸ図 打製石器の刃部形成

つてこの両側の磨耗は溝切り後の土かけによってできたものと推理することができる。

打製石斧（扁平石器）の量産は、焼畑で使用されたことは確かであるが、焼畑での使用は、常畑のそれに比較すると、消耗度が高いとみられる。したがって発見される石器の半数近いものが中央で折れていることも注意しなければならぬ。量産の必要もこうした焼畑での使用ということで消耗度の高いことによるものではなかろうか。

扁平石器と称するもののうち石庖丁形石器は、打製石斧（石鋏）に比較すると、その量はわずかに

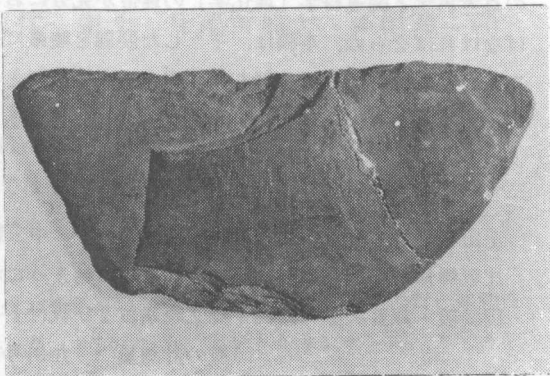
1パーセントに満たない。それでも、大石遺跡からは破片を入れると20点を越す量となる。石庖丁形石器は、磨製と打製とがあり、いずれも半月状に整形される。刃部は上下両側を使用し、弥生式のそれと比較して身は扁平で、上部の位置の穿孔がみられない、また刃部の磨耗が著しくなり、刃こぼれなどみられても研ぎなおして再度使用することはしない。横剥工法による機械的剥片作業で量産することが可能であるからと考える。

石庖丁形石器が穂摘み具であることは、その刃部の形成・磨耗・刃こぼれなどの使用痕によっても明らかである。中尾佐助氏は、石庖丁の存在で農耕を考えることは充分(上山・1969)であるとしている。石庖丁が弥生式のそれの如く材料を選択することなく、最寄りの石材を使用しているが、その加工に先駆的要素を否定することはできない。

石鍬(打製石斧)、石庖丁形石器の両者が量産されることは、大陸の古代農法と符合するとする見解に対し、その早計も比判の第一にかかげられている。しかし、この打製石斧が機能的な農具であるという見解は、その後数多くの調査でも明らかにされた。とくにその機能の問題は渡辺誠氏の桑飼下遺跡における精査で注目された。打製石斧にはじまる縄文農耕論が、その機能から農具と判断されるまでに、焼畑における農法の多岐にわたる観察、作物学や分析学などの提言などをふくめて、再度の認識が必要とされた。この問題については更に稿をあらためて論説したいと考えている。

おわりに

弥生以前の農耕の存否については、それを証明する資料として大陸半島に対比することがなかなかむずかしい。したがって、集落の構造、遺跡の立地、遺物の考察など考古学に加えて、民俗学における焼畑の問題、土壌などの分析による理化学的方法などを総合しなければならぬ。そうした困難な問題に加えて縄文文化の伝統的文化の推移の中での生産技術は 採集生活その実態の問題を差し引いた残りのものについて、吟味を必要とするものである。したがって、その問題を確実に把握する資料の一つとして、考古学的に、集落実態の証明が必要であった。またその集落から発見される遺物には農具と確認できるだけの実証が必要



第X図 石庖丁形石器(磨製) 大石遺跡



第IX図 打製石斧の刃部形成と使用

である。直接遺物としては炭化種子の検出が必要となるが、その層位的検査を厳重におこなわれな
 限り例え縄文時代の遺跡から発見されたとしても資料となり得ない。分析により植物性食料の組織の
 検査も層位的に厳しい検査が必要となることは勿論である。したがって、如何なる科学的検討、理
 化学的検査結果も、考古学的研究の基礎にしたがった研究のもとでなければ使用することはできぬ。こ
 の点考古学と関連科学（理化学）の連帯が充分におこなわれ、それぞれの研究範囲において成果をあ
 げなければならぬ。本稿は、そうした問題を峻厳に処理して、その覚え書きとして提起すべき問題を
 選択したものである。打製石斧の再考も民俗資料としての焼畑農耕にもとずいておこなわれたもので
 あるが、この点も今後問題を残すべきであり厳しい考古学的検討がおこなわれなければならぬ。

参 考 資 料

- 上山春平他 1964 「照葉樹林文化」 中公新書
 江坂輝弥 1974 「稲作は如何に始まったか」サンエンス 4
 岡崎敬・森貞次郎 1962 「縄文晩期および板付」—弥生初期遺跡出土の土器上の粃および炭化
 粃の計測量 九州考古学 15
 岡崎 敬 1968 「日本における初期稲作資料」—朝鮮半島との関連において 朝鮮学報49
 大山 柏 1927 「神奈川県下新磯村字勝坂遺物色発地調査報告」
 賀川光夫 1966 「縄文時代の農耕」 考古ジャーナル No. 2
 1967 a 「縄文時代の農耕の一問題」 考古学研究 13—4
 1967 b 「縄文晩期農耕の一問題」—石刀技法 考古学雑誌 52—4
 1967 c 「縄文晩期農耕の問題」—石鍬考 史叢 10
 1972 「日本における農耕文化の起源」別府大学考古学論叢 2
 1973 「原生国家の崩壊と古代国家の成立過程」 生活と科学 13
 1974 "Primitive Agriculture in Japan; Latest Jōmon Agricultural
 Society and Means of Production" Asian Perspective Vol.
 XVI (I) Hawii U.
 小谷凱宣 1971 「熊本市健軍町 上ノ原遺跡調査報告」 熊本市教育委員会
 1972 "Implication of Cereal Grains from Uenohava, Kumamoto" The
 Journal of the Anthropological Society of Nippon Vol. 80, No. 2
 Jun, 1972
 佐々木高明 1972 「日本の焼畑」 古今書院
 中尾佐助 1966 「栽培植物と農耕文化」 岩波新書
 渡辺 誠 1966 「縄文文化における抜歯の研究」 古代学 12—4
 1967 「九州地方における抜歯風習」 手塚山考古学 I
 1972 「縄文時代における植物質食料採集活動の研究」 古代文化 24—56
 1975 a 「縄文時代の植物食」 考古学選書 雄山閣
 1976 b 「桑飼下遺跡」 平安博物館